

愛知厚生連 海南病院

- 現在地における病棟増築 + 既存改修案件 -

狭隘な増築用地に、個室率30%を確保しつつ全病棟を新築

本計画は、419床規模の病院における病棟を中心とした増築計画である。40m×80mという、全病棟を建設するには狭隘にすぎる増築用地に全ての病床を収容しつつ、できるだけ多くの個室を確保するというハードルの高い設計条件を有していた。設計受注に先立ち病院サイドにより策定された『基本構想案』では、全病床数の70%程度の病棟を増築新棟に確保することにとどめ、個室率も18%程度とするというものであった。

この構想案に対して、『増築完了時及び将来共に病棟が2分されてしまう』『より急性期を目指す場合に20%を下回る個室率ではいかにも少なすぎる』という問題意識から、増築新棟に全ての病床を確保しつつ30%の個室を装備できる病棟計画を提案した。このような設計条件をクリアするために導き出されたのが、4床室と1床室を重ね合わせる病室平面型であった。結果として生じる、連なる4床室間の外部空間を活用して『廊下側のベッドにも固有の窓を設ける』スタイルの多床室もあわせて実現している。また、病室ではトイレを含まずに8㎡/床を確保するとともに、車椅子での利用や介助者が同室できるサイズの病室トイレとしている。『急性期医療現場における高齢化の問題』を意識してのことである。

病棟計画セオリーからみて

新病棟は、近年の病棟計画でのセオリーからみて、やや特異な形態を有している。

- ・病棟の入口側に4床室等の多床室を配置する。
- ・病棟の奥側、スタッフ・ステーションの背面に1床室やHCUを配置して、安定したハイケアゾーンを構成する。

といった近年の標準的スタイルに対してである。

本計画ではステーションを取り囲む廊下に面して前面側に個室が配置され、4床室はむしろ奥側に位置している。より看護拠点に近い側に1床室が配置されているわけであるが、このことが『安定したハイケアゾーンを設定しにくいのではないか』という疑問につながる。相対的重症病室(1床室)を看護拠点周辺に配置した急性期病棟としてスタートしつつも、近未来的には病棟全体がますます急性期化され、徐々に4床室が個室として分割されて行き、いずれは病棟全体がハイケアゾーンに徐々に変貌するというイメージを設計者としては描いた。当面は『スタッフ・ステーションの周りに19床の個室を集約したハイケアユニットを包含している病棟』として機能するというイメージである。

病棟サテライトキッチンの運用

新病棟完成を期に海南病院では「病棟サテライトキッチン」の運用をはじめた。栄養科業務における真空調理法+クックチルシステムの導入により、従前スタイルの病棟配膳室を発展させたサテライトキッチンが実に生き生きと運営されている。各フロアに配置されたキッチンには栄養士・調理師・給食係が専属で配置されており、再加熱調理・炊飯・汁類・配膳・食器洗浄等、チルド以降のほとんどの業務が病棟で行われることとなった。

結果として患者と対面で接する機会が増え、残食チェック・クレーム要望対応・栄養指導等の環境条件が大きく向上した。加えて「業務の合間に食堂でくつろいでいる患者や家族にお茶をサービスする」といった光景も生まれてきている。現在40%程度の患者が病棟食堂を利用している。

(文責：川島浩孝)

所在地	愛知県海部郡
病床数	553床(一般453床・回復期リハ60床・緩和ケア18床・ICU8床・NICU3床・GCU5床・感染症6床)
構造規模	鉄筋コンクリート造 地上7階
延床面積	39,542㎡(増築棟 18,525㎡)(既存棟 21,016㎡)
竣工	増築病棟 2002.12 改修 2004.05
設計監理	共同建築設計事務所(JV)